

「話せない」と言えるまで 言語聴覚士を襲った高次脳機能障害

関 啓子 ● 著

広島県立保健福祉大学名誉教授 綿森淑子

本書は失語症など高次脳機能障害の専門家である著者が、自らの心原性脳梗塞の発症直後から、録音・録画も含め、集積してきた膨大な記録のまとめである（音声と動画は医学書院のウェブサイトに掲載）。脳損傷の現実を内側からレポートした記録として貴重であるばかりでなく、一人の対象者の長期にわたる経過の全貌を明らかにしている点でも重要な資料である。

現在、脳卒中のリハビリテーション（以下、リハと略）は、おおむね半年で終了となるが、さまざまな治療法についての情報を積極的に求め、回復を促進できそうなあらゆる手段を利用してきた著者の場合、発症から約3年余にわたり機能回復が続いていることが記され、発症からの時間経過によって輪切りにされている現在の脳卒中リハの在り方に一石を投じる記録ともなっている。また、日常生活レベルでの数々の不便さとそれらへの対応、社会との関わりの中で感じた悲哀と心のバリアフリー化の訴えなど、脳損傷の影響の広範さ、甚大さが具体的に記され、それに立ち向かい克服しようとする著者の挑戦は、一般の読者や障害のある人、その家族にとっても共感で

きる内容となっている。

言語聴覚士として長年、失語症の人と向き合ってきた著者はかつて「病前の自分と今の自分を比較することは、どの時期においても益がないと思っています。……私は患者さんと『できたこと』に目を向けながら言語のリハビリをしてきました(2003)」と書いた。自らのリハにあたって、この信念を実践したのは当然だが、さらに進んで「不便な状態を楽しみ、より良い状態へと工夫することをゲームのように楽しもう」という夫君の提案も加味され、家族の全面的な支援の下、早期の職場復帰を目標に全力でリハに取り組む様子が詳述されている。

幸い、急性期から同僚などリハ専門職集団の強力なサポートを得て回復は順調に進むが、発話の困難（話し方が平板で、複雑な説明や電話での会話に苦労）に悩まされ、利き手である左手の麻痺と感覚障害は、復職後、発症前には想像もしなかったさまざまな生活上の困難をもたらすことになる。著者は病前、「患者さんの日常を想像し、共感する」ことを信条に臨床にあたっていたのだが、脳損傷者としての体験は著者自身の想像をはるかに超えたものであ



り、病前の自分は「（患者さんの困難を）現実的に想像し、共感しえていなかった」ということに気付く。そして、毎日接する患者の日常生活を具体的に想像して深く共感し、適切に支援することこそ「相手に寄り添う」態度であるとあらためて実感する。

医療者の多くは、“専門職モード”の中で忙しきにかまけて障害のある人の内面的世界を知ろうとせず、症状だけを見て対処しがちなのではないだろうか。本書のように「立場の逆転を経験した人だけが語れる患者の声」に耳を傾けることは、障害のある人たちの経験に寄り添い、共感を深めるうえで極めて有用であり、リハに携わる専門職はもちろん、医療、看護のすべての分野の人々にぜひ手に取ってほしい一冊である。

A5 頁256 2013年

定価2,625円

（本体2,500円＋税5％）

[ISBN978-4-260-01515-8]

医学書院刊